

当院における PEG 造設症例の実態と課題

伊藤 広樹、山口 恵、石川 雅一

いなべ総合病院 薬剤部 同外科

【目的】当院における内視鏡的胃瘻（以下 PEG）造設の実態を通し、今後の課題を検討した。

【方法】平成 23 年 4 月 1 日から平成 25 年 3 月 31 日の期間、当院で PEG 造設した症例 48 例（男性 24 例、女性 24 例：平均年齢 81.8 歳）を分析した。

【結果】PEG 造設に先立ち、言語療法士もしくは作業療法士により嚥下訓練が実施された例は 33 例（68.8%）であり、実施率は 24 年度で増加していた。合併症は 18 例にみられ、PEG 造設前に 8 日以上絶食となった例で高い傾向にあった。PEG 造設後、自宅へ退院した症例は 9 例、施設へ入所・他院へ転院した症例は 36 例、造設後 1 ヶ月以内の在院死は 3 例であった。栄養剤投与計画から逸脱したのは 16 例（早期にカロリー増加を実施した：8 例、カロリー増加が遅れた：2 例、栄養剤を変更した：2 例、一時的に栄養剤を中止した：4 例）であった。

【考察】嚥下訓練の依頼は増加傾向であり、院内において必要性の理解が深まった事によるものと考えられた。PEG 造設後の大部分は施設へ入所・転院しており、自宅での介護が困難である現状を示している。しかし、受け入れ先での実施栄養療法については不明であり、継続的な栄養療法、摂食機能訓練実施のために地域の医療・介護機関との連携を図っていく必要があると考えられた。